

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を事業所に提示し毎朝朝礼で理念の唱和し、職員の意識付けと、日々の実践に繋げるように個々に理念実践に向けた取り組みについても職員で共有している。	法人理念と事業所理念が玄関やホールに掲げられている。理念を毎朝唱和したり黙読をしている。ケア会議では理念が実践できているか話し合い、共有に努めている。新規の利用者や家族には法人理念と共に事業所の理念も伝えている。理念にそぐわない言動が職員にあった時には注意を促し、業務後に個別に話す機会を設けることもある。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の方に行事へのお誘いをしたり、地域のボランティアの方にお話し交流を行っている。	ホームのある竹原地区自治会に加入し、地域の一員として会合(新年会や行政との懇談会には北信地区統括施設長が出席)に参加し、特産の果物や野菜などの住民からの差し入れも頂いている。日舞、フラダンス、ハーモニカ演奏など、地域のボランティアの来訪もあり、交流している。隣接のデイサービスで開催される歌謡ショーなどのイベントにも出かけて楽しんでいる。中高生や社会人の職場体験や実習・研修等の依頼があれば受け入れる予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議では、区長さん、組の総代さん、民生委員さん、市の役員の方に参加していただき話し合いをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一度、会議を開催し委員の方たちに施設の状況を伝え意見を頂いている。夜間想定避難訓練の講評も頂いている。	偶数月の第4月曜日午後を基本に、家族、区長、組総代、民生委員(2名)、市介護保険課職員、地域包括支援センター職員の出席を得て開催し、ホームの活動や行事などを報告し、出席者から質問を受け、意見・要望も伺っている。開催日に関しては区長の年間予定を伺いながら次回の開催日を決めている。12月の会議は夜間想定避難訓練に合わせて行い、消防署員2名の出席もいただいた。会議出席者の交替期には「グループホームとは」と題した概要や役割を説明した文書を配付し認知症の啓蒙にも取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の委員として参加していただき、施設の状況を伝えたり相談している。	月1回、地域包括支援センター主催の事例検討会に出席し、その後、ケアマネージャー連絡会にも参加し、情報交換や新施設の職員の紹介なども受けている。介護相談員2名が2~3ヶ月に来訪し、利用者とお茶を飲みながら一時間ほど話している。介護認定調査には地域包括支援センター職員が来訪し、本人の状態を確認し、職員も本人の心身の状況を伝えている。認定調査に家族が同席することもある。更新申請は家族の依頼を受け代行したり、書類の書き方についての相談もあり助言している。区分変更は家族と相談した上で代行している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員、危険防止委員が中心となり研修会を開き理解を深めている。	玄関の施錠を含め拘束や行動を抑制する行為が行われたことはない。法人の身体拘束委員会、危険防止委員会にホームの委員が参加した後、委員会で決まったことを報告し、伝達研修なども行い拘束をしないケアに努めている。法人内のグループホーム部会としての研修会(認知症に関する研修と6ヶ月間内に全職員の交換研修)があり、資質向上に活かされている。車椅子の利用者が昼食時、木の椅子に移動する姿も目にする事ができた。	

グループホームこうしゃ敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束委員が中心となり研修会を開き理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会を開き理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時家族に契約書、重要説明事項の説明を行い納得いただけるまで説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族の面会の際、日頃の様子について状況を伝えたり、意見要望を交換しながら適切な運営が出来るようにしている。	利用者の多くは言葉やしぐさなど何らかの方法で思いを伝えることが出来る。家族の来訪は月に2～3回が多く、頻繁な方は週4～5回、少ない方でも月1回は見えている。家族が来訪した時には本人の様子を伝えている。家族の意見・要望を受け入れ、食事の場所を固定せず色々な人と話せるように席替えをしたり、職員が利用者の間に座り、他の人のお膳に手がいかないよう配慮したりしている。昨年のクリスマスのイベントにあわせ家族会(5家族6名が出席)を開き、意見交換もしている。今後、家族会を通し家族との意思疎通を更に深めていきたいという。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員のケア会議は全員で出席し意見交換をしている。	ケア会議(月1回)は基本的に月初の月曜日19時から21時頃まで行われている。内容は法人の運営会議の報告、研修、課題の検討、居室担当の提案などで、職員は積極的に意見を述べている。身体拘束、人権尊重、接遇、倫理、危険防止、感染予防対策など、年間計画で研修が行われ、各委員会の委員が中心となり講師役を務めている。研修後、「学んだ事、今後の業務課題、研修の活かし方」などのレポートを各職員が提出している。法人としての人事考課制度は順調に進み、完全実施は先になりそうではあるが今後も継続される予定で、管理者は半期毎に各自の目標を基に職員と面談している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体での職員管理(人事考課制度)し、働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内、法人外の参加をし職員の質を高めるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣のグループホーム交流会に参加し研修を行っている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人と面談をしご本人の思い、困っている事、不安な事、望んでいる事を傾聴し不安なく生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の事前面談でご家族様の不安な事、希望、思いをお聞きし良い関係性を築けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人、ご家族との面談を通して必要なサービスを提供していき状況に応じて他のサービスも提供できるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご利用者様の出来る事は手伝ってもらいながら共に過ごしていけるように心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会などでご意見を伺う機会を設けたり、ご利用者の訴えや変化がある場合には電話などでやりとりができるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人の馴染みにしていた物を施設で使用している。家族や友人など面会に来られた方にはご本人との時間を大切にさせて頂けように努めている。	遠方から子供が帰省して一緒に温泉に泊りがけで出かける方、なかなか会えない子供のところ(娘の嫁ぎ先)へ家人と一緒に会いに行く方もいる。年賀状や手紙を書き友人に出している方もいる。家族から電話があり自室で話す方もある。親しい友人から「体調はどうか、会えるか」と事前に確認の電話をいただくこともある。デイサービスでのイベントを見に出かけた時、昔の知り合いや近所の方に会い、旧交を温めている利用者もいる。職員は馴染みの関係の継続が利用者の安心した暮らしには大切であるということを理解し支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座席の位置を固定せずご利用者が孤立しないように、又、トラブルが発生した場合には傾聴し対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了した後も家族と連絡を取り相談や支援に応じる姿勢を示しながら経過を見守り、必要に応じて情報を詳しく伝えその人らしい暮らしの継続性に配慮するよう努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者がその人らしく暮らせるよう、その人の思いや希望を把握し、把握が困難な場合には職員間で本人の思い、視点に立って意見を出し合い、話し合いをもち検討している。	役割を持ち、生き甲斐のある生活をして欲しいと利用者一人ひとりの話やつぶやきなどに関心を持ち、日々接している。「あれをやりたい。自分の分は洗いたい」という利用者には腰掛けてできる茶碗拭きを昼と夕に様子を見ながらお願いしている。食べることで「パンが好きだからたまには食べたい、ジャムを塗ったのもいい、ロールパンがいい、レーズン入りもいい。好きなコーンポタージュと一緒に」等の希望がメニューに活かされたという。補聴器が機能を果たさないため、筆談で話せる方は「テレビは字幕があるので嬉しい」と答えながら笑顔を見せていた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人が穏やかに自分らしく暮らせる様生活環境に配慮し、ご家族や知人など馴染みの関係を継続し、又築きながらサービス利用の経過の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人の出来る力、分かる力、役割を持ちその人らしく暮らせるよう、又心身状態の安定が保てるように一日の過ごし方を職員間でチームとして連携、把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人がより良く暮らすために、アセスメント、モニタリングを繰り返しながら状況の変化に応じて話し合い、ご家族の要望を踏まえ意見やアイデアを反映した介護計画書を作成している。	職員は1~2名の利用者の居室を担当している。職員は担当利用者の心身状態をアセスメントし、ケア会議で報告し、話し合っている。計画作成担当者は本人や家族の希望を基に職員の話し等を参考に介護計画を作成している。モニタリングは本人、計画作成担当者、居室担当者として毎月実施し、居室担当者、計画作成担当者の二人が評価している。目標や内容に問題がなければ継続を繰り返し、短期は3ヶ月、長期は6ヶ月で見直しをしている。状況が変われば現状に即したものに修正したり作り変えている。介護計画は本人にも説明され、本人がサインしているものも見られた。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や会話、実践、結果、気づきを個別記録に記入し、より良いケアに向け情報を共有しながら、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人、ご家族の状況、ニーズに対して柔軟な心を持って、支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。		

グループホームこうしゃ敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ご利用者が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしが楽しめるように、民生委員やボランティア、理美容院、掛かり付け医への受診などを把握し、地域の人達との交流等の取り組みをしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診時は家族の付添いで納得にいく掛かり付け医への受診、事業所と掛かり付け医との連絡、関係を築きながら適切な医療が受けられるよう支援している。	それぞれの利用者にかかりつけ医がいる。定期受診には本人の状態などを書いた情報提供書を付き添う家族に渡し、かかりつけ医に届けている。状態によっては長野県ケアマネジャー協会作成の医療連携シートを使うこともある。緊急時には家族に連絡し、居室担当もしくは当日の勤務者が必ず付き添い本人の状態を医師に伝え、適切な医療が受けられるよう支援している。協力医療機関の訪問看護ステーションの看護師が週一回来訪し、利用者の健康管理等が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の体調の変化を観察し、早期発見、医療関係者との連携に努めながら早期対応し、ご利用者が適切な受診、看護を受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ご利用者が入院する際はご家族と良く相談し、医療機関に情報提供している。又、短期間での入院になるよう、病院関係者、ご家族と話し合いスムーズに退院できるように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の支援については、ご家族の意向を確認しながら掛かり付け医との対応方針を共有し職員間での話し合いを持ちながらチームで支援に取り組んでいる。	「重度化及び終末期ケア対応指針」があり、契約時に本人や家族にホームの基本姿勢を説明している。現在、最期まで利用を続けたいと希望する方がいる。体調をくずし入院せずホームで過ごしていた利用者が、訪問看護師から「急いほうがいい」と医療機関に連絡し救急車で病院に搬送され5日後に亡くなられた。一緒に過ごしていた利用者は「病院に行っただけで帰ってこないね」と話していたが新聞のお悔やみ欄で亡くなったことを知った後、自然に冥福を祈る利用者もあり、特別、混乱するようなことはなかった。職員研修で看取りについても学んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ご利用者の急変や事故発生時の備えマニュアルを用意し慌てず落ち着いて初期対応や応急手当が行なえる様、定期的に訓練、話し合いをもっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時、確実な避難誘導が出来るよう話し合い訓練を行い、地域との協力体制を築いている。災害時の発生に備え、食料、飲料水など物品を準備している。	地元竹原区とは災害時の協定書が結ばれている。そのため事業所の災害訓練には近くの住民も参加し、消防署の指導の下、年2回昼夜想定訓練を行っている。前回訓練では利用者の誘導に時間がかかりすぎていると指摘を受け、その指摘事項を改善するために工夫(ベッドや車椅子毎避難、利用者用の情報プレートなど)したことで時間短縮にもつながり消防署員から良い講評を得ている。防災対策委員会主催の法人全事業所一斉防災訓練は毎年9月防災の日に行われている。備蓄も3日分あり、スプリンクラー、火災報知機、通報装置、誘導灯など防災設備も完備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者個々を尊重し、言葉かけには注意している。特に、排泄介助の際は不快な思いをされないように注意している。	呼びかけの基本は苗字に「さん」を付けるようになっている。排泄や入浴支援時には特に留意しながら対応している。接遇、倫理、人権等の研修も年間計画に組み込まれている。個人情報取扱に関する同意書を本人や家族と取り交わしている。グループホーム新聞や通信に載せる利用者のスナップ写真には目隠しなどで配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者自身の思いが言葉で言えるよう普段の関わりを蜜にし伝えやすい話しやすい環境作りを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の日課表はあるが、体調やその日の状態に配慮しながら個別に対応ができるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髭剃り、洗面、整容等行え一日が気持ちよく始まるように心がけている。衣類の乱れがないようしたり、おしゃれが出来るように関わっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	漬物作りや手作りおやつを月に一回計画している。又食後の洗い物等職員と一緒に状態に合わせて参加してもらっている。	献立は法人の管理栄養士が作成し、食材は法人委託業者により届けられている。利用者の嚥下や咀嚼にあわせた食形態で食事やおやつが提供されている。食事中は出された料理のこと、大雪のこと、子供時代の手伝い(養蚕)等の話で笑ったり感心したりと和やかな時間が流れていた。献立は1週間毎写真で紹介されているので利用者は「今日は何かな」と楽しみに見ている。おやつ(お好み焼き、誕生ケーキ等)も楽しみながら作っている。差し入れの野菜を何に使うか料理方法を利用者相談し、大根の甘酢漬けなど、利用者の知恵をいただきながら一緒に作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食べれる量を提供している。食事メニューは管理栄養士が作成し管理されている。みそ汁の塩分にも注意している。個々の食事形態に合わせている。食事量、水分量をチェックしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行なっている。個々のレベルに合わせて声掛け見守り、必要な方には介助にて実施できるように努めている。		

グループホームこうしゃ敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	職員全員でカンファレンスを行い個々のタイミングでトイレ誘導や排泄介助をしている。状態の変化が有る時はその都度カンファレンスを行っている。	一部介助や全介助の利用者がいる。夜間オムツの方もいるが、日中はリハビリパンツにパットで過し、トイレで排泄をするようにしている。夜間のみポータブルトイレを使う方もいる。他の利用者に分かるような失敗をする利用者はいないが、職員は小さなサインも見逃さず誘導し、失禁予防にも努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一日の日課としての午前の体操の実施。又、水分摂取量や下剤の内服の調整をし排便チェック表を活用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一ヶ月毎に予定を組んでいるが、利用者の体調や予定に合わせて変更している。	シャワーキャリーが購入できたことやリフト浴槽のおかげで全介助の利用者も職員一人でも対応できている。入浴は週2回以上を基本としている。冬至には柚子湯を楽しんでいただき、その他、入浴剤なども楽しんでいただいている。「お風呂どうですか」などと声をかけ、本人の気持ちを確認した上で支援している。脱衣所は床暖となっており、浴室との温度差を少なくするようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者個々のに合わせた休息の時間を作っている。昼食後は全員午睡をしていただき無理なく過ごせるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルを作り、薬説明書を綴じて職員がいつでも確認、把握できるようにしている。又、毎食時服薬が正しくできるように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	アセスメントシートを活用し、ご本人の趣味や生きがい希望を取り入れている。生活での役割をもてるように務めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近くに温泉があるので足湯に出掛けたり、絵付けや地域のイベントに出掛けている。	地域ならではの土雛の絵付け体験、バラ公園の見学をし、その後足湯などを楽しんでいる。お花見をした後は中野名物の揚げ饅頭をお土産に買ってきてホームで食べている。昨年5月、隣にデイサービスが出来てからは今までのように数人での外出でなく大型車で利用者、職員と一緒に出掛けられるようになり、楽しさも倍増している。デイサービスのイベントや納涼祭にも出掛けている。年末年始に家族と温泉に泊りがけで出かける利用者もいる。	

グループホームこうしゃ敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が現金を使用する機会はない。必要時は立替を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者より要望があれば手紙を書ける環境を作り投函の支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホール内のテーブルには季節の花や飾り廊下の壁には行事や日常の様子を写したスナップ写真等掲示し居心地よく過ごせるように工夫している。	開設時に贈られた観葉植物の5鉢が早くも利用者の背丈以上に成長していた。食堂は床暖になっており、床から一段高くなっている畳敷きの小上がりの一角には暖かな陽差しが差し込んでいた。掲示板には職員手作りの押し雛、折り紙のお雛様や干支の馬の貼り絵、利用者手作りの巾着袋と押し葉の作品、利用者の笑顔があふれる行事の写真などが飾られている。利用者は食堂で新聞を読んだりテレビを見たり、新聞紙を折ったり趣味の縫い物をしたり、おしゃべりなどを楽しみながらのんびりと過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	席への配慮をし、楽しく会話ができるようにしている。又、座る場所は利用者と相談しながら変更している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居事前説明の際、利用者が長年使用されてきた身の回り品などを持ち込んで頂くよう働きかけている。	各居室にはエアコン、クローゼット、洗面台が備えつけられている。筆で書かれた達筆の文字が居室一杯に飾られていたり、家具の上の人形の中に家族写真が置かれていたり、位牌を持ってきている利用者は毎朝お水をあげているという。居室からは高社山か飯綱山のどちらかを見ることが出来る。利用者にとって、自室が一番居心地よさそうであった。家族にも居室担当者がわかるように居室の表札の下に職員の名前が掲示されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個別に作成した道具を使っていたいでいる。居室入り口には表札がある。		